



IFES Issues and Analysis - NO.83 [2019-01] Jan. 4, 2019

金正恩氏の2019年新年の辞：評価と見通し



李寛世
慶南大極東問題研究所長
kslee712@kyungnam.ac.kr

金正恩(キム・ジョンウン)朝鮮労働党委員長の2019年の新年の辞の発表は形式的な側面から、2013年に初めて肉声で新年の辞の演説を行って以降、これまで見せてきた行動を続けたものといえる。ただ、人民服を着て演壇に立ち新年の辞を発表したのと異なり、今年金委員長は黒いスーツにネクタイを締め、ソファに座って発表した。社会主義を象徴する人民服の代わり、黒いスーツにネクタイを締めたのは、正常国家の指導者であるイメージをアピールする狙いとみられ、ソファに座って発表したのは金委員長が米国など他国の首脳と違わないとの意味を込めたものと解釈される。

金委員長の新年の辞は内容的な側面から、対内経済や政治、社会部門と関連し、特徴的に目立つところは多くなさそうだ。「自力更生」の強調は北朝鮮の核・ミサイル開発から始まった国際社会の対北朝鮮制裁の強化が容易に解決されるものでないということを勘案したものとみられる。一方、これまで金委員長が新年の辞など公開演説で時には数字を取り上げ、経済的な目標値を提示したことと異なり、今年の新年の辞ではこうしたものがほぼなかったことが目立つ。

対韓国部門の内容は金委員長が昨年末、文在寅(ムン・ジェイン)大統領に送った親書である程度予告されたものといえる。金委員長は親書で文大統領と頻りに会い、朝鮮半島の平和・繁栄に向けた議論を進展させ、非核化問題も共に解決していく用意があることを明らかにした。新年の辞も2018年の南北関係を極めて肯定的に評価し、2019年にも南北関係をさらに拡大・発展させていくとの強い意志を盛り込んでいる。金委員長は「いかなる前提条件や対価なしに」開城工業団地や金剛山観光を再開させる用意を表明し、引いては南北関係を通じて制裁と圧力という問題も克服する意志を示した。

金委員長が新年の辞で「統一」を複数にわたり強調したことに注目する必要がある。特に、「全民族的な合意に基づいた平和的な統一方策を積極的に模索しなければならず、その実現のため真摯な努力を傾けるべきだ」と述べたのは、今後北朝鮮が当局レベルだけでなく、民間レベルでも対韓攻勢をかける可能性をうかがわせるものといえる。国際社会の対北制裁が続けられ、当局レベルの南北関係の拡大・発展が容易ではない状況であることを考慮すれば、北朝鮮が民間レベルなど迂回経路を積極的に活用する可能性がある。こうした状況では北朝鮮が既に提案した「南北諸政党・社会団体連席会議」または「全民族会議」などを再び持ち出す可能性がある。

平和体制の構築に向けた多国間交渉の推進提案は2018年の朝鮮半島情勢が急速に転換するなかで、韓国政府が米朝関係の改善や非核化などで大きな役割を果たしたことを北朝鮮が認識したため可能になったとみられる。非核化や新しい米朝関係構築、朝鮮半島の平和体制を連動させている北朝鮮が米国との2国間交渉で相当な困難に直面し、緊密な関係にある韓国と中国を交えた多国間交渉へと場を広めようとする意図がこの提案に含められているとみられる。

対外部門の内容に関連しては、非核化を含む6月12日の米朝共同声明の履行や2回目の米朝首脳会談の開催に向けた強力な意志を金委員長自らが重ねて強調したことに意味がある。特に、金委員長が「これ以上核兵器をつくりも…せず」と言及した内容に注目する必要がある。これは2018年10月、ポンペオ米国務長官の4回目の訪朝後、米朝の実務協議が膠着状態に陥り、最近米国の研究機関を中心に北朝鮮が核・ミサイルの開発を続けているとの見方を相次いで示していることに対する対応であると解釈される。これとともに、ミサイルに関する言及が新年の辞にないことは、北朝鮮の非核化への本気度に疑問を持たないようにする意図によるとみられる。

非核化のプロセスに関連しては、北朝鮮の既存の立場が今回の金委員長の新年の辞に反映されると同時に、ある程度柔軟性が加えられたものと評価される。米国との関係改善を通じ敵対関係が解消し、相互信頼が構築されれば核・ミサイルをはじめとする関連開発プログラムを放棄・廃棄できるとの従来の立場を新年の辞でも確認することができる。これとともに、2018年南北関係の進展を手本とし、「互いの頑固な主張から大胆に脱し…臨むなら」と言及しているのは2回目の米朝首脳会談など米国との交渉で多少柔軟な姿勢を示す可能性を示唆したものといえる。金委員長が「新しい道」を取り上げたのは、交渉が容易ではない場合、米国に圧力をかけることで交渉力を高めるためという目的とともに、米朝交渉で成果を出せない場合に推進しなければならない次善策の

ための複線である可能性がある。

金委員長の2019年の新年の辞と昨今の状況を総合すれば、米国との非核化交渉に対する北朝鮮の意志は確固たるものとみられ、従って米朝交渉も近く再開されると予想される。北朝鮮は南北関係の改善・発展への積極的な意志も持っていると思われる。特に、北朝鮮は2018年に南北が合意した軍事的な緊張緩和に向けた措置を積極的に履行することで朝鮮半島の平和定着や体制の安全保障、南北関係の発展に肯定的な環境を整えようとすると思われる。これとともに、朝鮮半島の平和の雰囲気が高まる過程で政治的な側面の環境整備のため、韓国に対して平和攻勢を展開する可能性がある。国際社会の対北制裁が緩和されたり解除されたりしない場合も北朝鮮は開城工業団地や金剛山観光事業など南北関係の発展のための交流・協力の拡大を推進しようとする可能性がある。これを通じ、国際社会によって続けられている対北朝鮮制裁の代替効果を挙げる一方、南北関係の進展を通じ体制の安全保障をさらに確固たるものにする可能性がある。すなわち、北朝鮮は2019年の非核化や制裁緩和・解除、南北関係の進展を相互連動させ、好循環する対韓・対外戦略を推進するとみられる。

[MORE ARTICLES](#)

一メールリングリストに登録をご希望の方はお名前や電子メールアドレス、所属先を下記のメールアドレスまでお送りください。 ifes@kyungnam.ac.kr

You can remove your email address from our mailing list by clicking link below

[\[No longer receive e-mail\]](#)



경남대학교 극동문제연구소
The Institute for Far Eastern Studies

COPYRIGHT(C) 2010 IFES ALL RIGHTS RESERVED
2(Samcheong-dong) Bukchon-ro 15-gil, Jongno-gu, Seoul 110-230,
Republic of Korea
TEL. +82-2-3700-0739 FAX. +82-2-3700-0707
EMAIL. ifes@kyungnam.ac.kr